白隠の「天神経」

Norman.Waddell（教授・英米文化、日本仏教文化）

書誌学に専門外の私が最近事情があって、それに頭を突っ込むことになりました。私がこれまでずっと研究してきた白隠禅師（1686-1764）の伝記の中、「天神信仰」について長年抱いていた疑問を、去る八月に思い掛けない巡りあいによって、少し解くことができました。その事を紹介しようかと思っていた丁度その時、図書館の方から図書関係の記事の依頼を受けました。一石二鳥というわけです。

天神信仰と禅僧との関係は、室町時代から始まったといわれ、五山の絵にも漢詩にも天神はよく出てくる主題であります。中国の無準禅師（1178-1249）のもとに天神があらわれ、一晩で印可を得、梅一枝をもって帰国したという「渡唐天神（とうてんじん）」伝説も、おそらく五山の僧によって制作されたのでありましょう。室町以降になると天神信仰は寺子屋で多くの子供たちに教え込まれることになりました。

白隠（幼名岩野）は、彼の自伝である『壁生草（まぐさ）』（1766）の幼稚（おさな）体験の中で、自分の天神信仰の原点を次のように述べています。

> 老僧、若年の時、母人摩頂して親しく告げて曰く、你須らく北野の神を敬し奉るべし。熟つら指を屈して、你が誕日を考うるに、貞享第二丁丑の歳の臚月廿五…年月日時供に是れ丑…二十五日は忝くも丑天神の御縁日なりと。

その頃、日蓮宗の説教師が八熱地獄の苦しみを詳説していることを聞いて、岩野が大変心配することになり、その苦しみをのがれる方法はないかと母に泣きながら尋ねたところ天神信仰を勧められました。若い岩野はその日からそれを実行しました。

> 持仏堂を掃除し、北野［天神］の御影を掛け奉り、香華を擎げ、天神経数十返讀み終り、是より毎夜鶏りの鳴くを待って…［持仏堂で］北野の寳號を唱へ、例の天神経数十返に及ぶ。
>
> （『八重葎（やえむぐら）』）

先に述べた私の疑問の話は三十年程前に遡り、『壁生草』を悪戦苦闘を重ねて英訳に取り組んでいた頃、若い白隠が唱えた「天神経」という題名についての謎でした。大辞典や『国書総目録』を調べて、北野天満宮の研究所を尋ねてみても、得るものは結局何もありませんでした。「天神経」という題名は白隠が作ったものなのか、あるいは、祝詞か天神の名号一般を指しているのかと考えるようになっておりました。

謎が進展のないまま二十年たちました。禅文化研究所から『壁生草』を含む十三冊の白隠法語全集が出版され、詳注の中で「天神経」について、編集者芳沢勝弘氏が「天神経」は江戸初期の寺子屋で使われた教科書の巻末に付録したものであると初めて解明され、又「口伝によって小異があることが多く、意も通じがたいところがある。室町以後の作とされる。寺子屋などで用いられた教科書である各種の『往来もの』の巻末に付録として載せられた」と説明されておりました。「天神経」の短い漢文テキストも紹介しておりました。

> 如是我聞、一時仏在須菩提王、八万四千寳蔵、金剛般若波羅密多、第一梵天王、第二帝釈天、第三閻羅王、釈迦牟尼仏道、三千大千世界、広大福寿経、一切諸仏奉行礼拝供養慧命、須菩提王、一切明神等、三千大千世界、供養諸説奉

行、南無天満大自在天神。

「天神経」の問題がそれでほぼ解決したように思いましたが、今年の夏、某競売目録の「天神経」という書物の写真に私の目が釘づけになりました。形は教科書の「天神経」と違って、単行本の仏典のお経の折本装でした。十枚、高さ約８cm、伸した長さ（表紙の部分も入れて）約32cm、紙の質などから、17世紀の版行と推定されました。表裏の表紙に「天しんきや（う）」の原題簽が付され、巻首に菅原道真の象徴である松樹と紅梅の前に上畳に座している「束帯天神」、淡彩色扉絵とその上に詠一首が刻まれています。「いづくにも　むめさへあらば　われとしれ　こころつくしに　ほかなたつねそ」

その後、正式な題名「南無天満大自在天神経」と「天神経」の本文15行が続き、上記の漢文テキストを仮名文体になおされた点以外は、ほとんど同じです。

によぜがもん。一じぶつざい。しゆぼだいわう。八まん四せん。はうざうこんがう。はんにやはらみつた。だい一ぼんてんわう。だい二たいしやくてんわう。だい三えんらわう。しやかむにぶつどう。三ぜん大せんせかい。くわうだい。ふくじゆきやう。一さいしよぶつぶぎやう。らいはいくやう。えみやうしやぼだいわう。一さいみやうじんとう。三ぜん大せん。せかいくやう。しよせつぶぎやう。

即説咒曰：唵堂心堂心娑婆訶（をんどうしんどうしんそわか）

巻末に禅宗の影響を示す「渡唐天神」像とその横に、紅梅と建物の一部の淡彩色挿し絵と詠一首が刻まれています。「むめあらばいかにはにふのこやなりと　われたちよらんあくましりぞけ」

題名、呪文を付着した経文の体裁、すべてが仏教様式で、そういう形で制作されたということに当時天神信仰の強い仏教や禅的な要素がうかがわれます。

幼い白隠の自伝に出てくる「天神経」はこれと同じ版かどうかは証明する確かな証拠はないにしても、その可能性はいくつかの事実によって示唆されています。例えば、仮名文体の体裁は子供に読み易くしてあるところ。それに、この「天神経」以外には知られていない扉絵と一緒に刻まれている詠は、白隠が描いた渡唐天神図の讃として数回使われています。それはともあれ、新しい文献が現れるまで、これは「白隠の天神経」とみてよく、そしてそれによって、長年、白隠の自伝にまつわる私の抱いていた疑問のひとつはもう気にしなくてもよくなりました。

天神経